

第 1 章

分解する

1. 分析と価値

「このテキストを分析せよ」——これはいったい、なにを要求しているのだろうか。

ここではさしあたり「テキスト」を、大学の授業などで与えられる、ごく普通の資料であると想定して話をすすめよう。それは、とりあえず誰でも読んだり観たりして理解することが可能な、いわばなんの変哲もないテキストであるとする。

だから、それを「分析せよ」という要求は、なにか複雑で難解な箇所を解説するとか、あらかじめ教員が想定している答えに到達するとか、そのようなことを求めているのではない。

つまりそこでは、「自由な分析」こそが求められている。だが、その「自由」な「分析」とは、どういった行為を指すのだろうか。なにに成功すれば、「テキスト」を「分析」できたとみなされるのか。そのことについて原理的に考えてみたいのだ。

ここではなんの変哲もないテキストを想定した。それは、おおむね誰でも鑑賞することが可能な資料である。にもかかわらず、あえてそれを「自由に分析せよ」と要求するということは、その誰でも鑑賞可能なテキストについて、誰でも可能な分析を展開してみせることを期待しているわけではないはずだ。

だから「自由に分析せよ」という要求には、どんな分析でも応えられるわけではない。そこでは、ある種の分析が求められている。ではそれは、どのような分析なのか。

「テキスト分析とはなにか」、「なにが要求されているのか」、いろいろな問いを立てかたがありうるが、ここでは問題の所在をあきらかにするために、まずはつぎのような問いを立てることによって話をすすめたい。

いかにして、誰でも鑑賞可能なテキストを「分析」することに価値が宿るのか。

テキスト分析においては、なんの変哲もないように思えるテキストから、分析によって独自のなにかを抽出することが暗に求められている。**誰でも鑑賞可能なテキストから、オリジナリティを抽出すること。**これが「分析」の内実である。

「自由に分析せよ」とは、実質的に、「独自性によって価値を産出せよ」という要求にほかならない——これが、われわれの出発点になる。

ただし、これは問題の所在がクリアになっただけで、さほど解決のほうにはすすんでいない。テキストから独自性を抽出するとはどういうことなのか。独自性に価値が宿るとはどういうことなのか。いや、そもそも、独自性とはなんなのか。

これらは、人文学の根幹にかかわる問いでもある。

大学における人文系の学部では「テキスト分析」というタイトルを冠した授業はひとつの定番だが、**このテキスト分析とは人文学における学術的な価値生産の根幹をなす技法であり、その習得は必要不可欠である。**

もちろん人文学における価値にもさまざまな形態がありうるが、その基礎のひとつは、まさに誰でもアクセスし理解することが可能なテキストに分析を施すことによる価値産出なのだ。なぜ、どのようなメカニズムによって、そのよう

な行為が学問として成立しているのだろうか。

テキスト分析とはなにか——その本質に迫ろうとすることは、人文学という学問の本質に迫ろうとすることにほかならない。

ではあらためて、テキスト分析とはなんなのか。それは独自性による価値産出であるという定義から出発して、テキスト分析の本質に接近してゆこう。

2. 自明性と独自性

あなたは大学の新入生。はじめての履修登録に心をときめかせながら、映画の『ゴジラ』シリーズを観るという内容の授業を履修したとしよう。教室に来てみると、規模は15人ほどであるらしい。やがて、Tシャツに短パンという、教員とは思えない装いの男が、10分も遅れて現れる。これが大学か……。しかし、4月でこんな薄着なら、夏にはどうするのだろう。

初回はオリエンテーションだからすぐ終わります、などと言いつつ、教員は『ゴジラ』についてペラペラと喋りつづけ、けっきょく時間いっぱい使いつつある。そして、終了5分前というあたりで、おもむろに「ちょっと次週まで考えてきてみてください」ということで、ある課題を出す。

「1954年の初代『ゴジラ』のポスターを自由に分析せよ。」

いかにも大学らしい、新入生が面食らいそうな課題だ。正式な発表ではなく、口頭でカジュアルに答えるだけでよいらしい。この課題にノーヒントでどのように答える学生が今年は集まっているのか、それをこの教員は探ろうとしているのである。

次ページにそのポスターを用意した。あなたも、すこし時間をかけてトライしてみてほしい。もしかするとあなたは映画に詳しいかもしれないが、ここでは『ゴジラ』という作品について、「日本を襲う怪獣についての日本映画である」ぐらいの前提知識しかもっていないものと仮定して話をすすめよう。

例題1 1954年の初代『ゴジラ』のポスターを自由に分析せよ。



さて、あなたは、このなんの変哲もないテキストを渡されて、どのような「分析」を行っただろうか。

まずあなたは、**なにかに注目したはずである**。このポスターでもっとも目立つ要素は、もちろん中央のゴジラ、そして左側の「ゴジラ」という赤い題字であるだろう。これらの存在には、**誰でも気がつく**。もうすこしよく見ると、下部には4名の登場人物らしき人びとがいる。ゴジラのまわりを戦闘機が旋回し、背後では国会議事堂が炎上している。

「テキスト分析とは独自性による価値産出である」という定義に戻ろう。いまわれわれが考えたいのは、いかにこのポスターをうまく分析するかではない。このポスターの分析を具体例として、**テキスト分析と価値産出の問題についての原理的な理解を得ることである**。

「中央にゴジラが立っており、左に赤い題字が書かれている」。あとで説明するように、これはすでに「分析」の一種である。**ところで、この分析には独自性があるといえるだろうか？**

むろん否である——と、おそらく誰もが考えるだろう。そのとおりである。しかし、なぜなのか？ **なぜこの分析には独自性がないのだろうか。その理由を、まずはつぎのように説明してみよう。**

この分析に独自性がないのは、それが自明だからである。

これは当たり前のようだが、価値の産出という営為の本質に触れるきわめて重大なポイントである。慎重にいこう。

まず、いまわたしは、独自性＝オリジナリティという、**人文学の評価において頻繁に用いられる語彙の対義語として、自明性という言葉を導入した**。本書では以後、「独自性」という言葉を、「面白い」とか「斬新」などの類語ではなく、「自明ではない」という意味で用いることにする。

分析には、自明なものと、自明でないものがある。テキスト分析が独自性による価値産出なのだとすれば、われわれは最終的に、**なんらかの意味で自明性の外に出るための方法**を考えなくてはならないことになるだろう。

しかし、事態はさほど単純ではない。**いったい、自明であるとはどういうことなのか**。自明と非自明の境界はどこにあり、そして、だれがその境界線を引くのか。

なにが自明でなにが非自明かの判断は、あきらかなように、人それぞれであるとしか言いようがない。にもかかわらず、その判断は不可欠である。ではどうすればよいのか。そこで重要なのが、**オーディエンス**の存在である。つまり、あなたの分析の読者だ。

これは15人の授業なのだった。その履修者15人と教員が、あなたの「読者」である。その初回の課題ではもちろん、ものすごく高度な分析は求められていないだろう。ただし、「中央にゴジラがいて、左に赤い題字があります」では確実にダメである。なぜか。それは**教員はもちろん履修者も全員がまず間違いなく気づくからだ**。それがつまり、「自明である」ということの具体的な内実である。

ここからは「独自」の対義語として導入した「自明」という判断を、「**オーディエンスがみんな気づく**」という意味で使うことにする。教室にいる（おおよそ）全員にとって自明な分析は、その教室において独自性があるとみなされることはない。したがって、そこに価値は発生しない。

ではどのあたりから自明でなくなるのか。それは、**正確にはわからない**。なぜなら、他人がどこまで気づくかは、こちらには正確に予測しえないからだ。

とはいえ、ゴジラの存在と赤い題字にくわえて、4人の登場人物、炎上する国会議事堂、旋回する戦闘機、これらもまた、やはり**まず確実に自明であるだろうと**考えておいたほうがよさそうだ、と判断することはできる。

じっさい、「このポスターでは下に4人の登場人物らしき人びとが描かれています」という分析を聞いて、あなたは「なるほどたしかに！」とは思わないだろう。「うん、で？」という感じだと思う。この反応がまさしく、その自明性の範疇にとどまった分析は「このテキストを分析せよ」の要求にまだ応えられていませんね、という判断である。

テキスト分析、ひいては人文学という学問においては、この「ここまでは自明だろう」という推測が決定的に重要である。これはすなわちオーディエンスの能力を察知するということであり、それはいいかえれば、**自分の読者はおおむね自分と同じかそれ以上のリテラシーを持っているはずだと想定すること**にほかならない。

自分が気づくことは、他人も気づくはずだ。これがテキスト分析において求められる態度である。その態度とはとりもなおさず、知的謙虚さにほかならない——いまあなたは、人文学というコミュニケーションの領域に足を踏み入れつつある。

自明性と非自明性の境界は、正確には判断しえない。だからこそわれわれは、「自分でもすぐ気づいたぐらいだし、このへんまでは誰でも気づくだろうな」という自省的な推測をたえずくりかえしながら、独自性に触れるための境界を探ってゆくことになるのだ。

ポスターに戻って、すこしだけやってみよう。あなたは戦闘機が3機あり、そのうち2機が白く、残りの濃緑色の1機が「ゴ」の題字の手前にあることに気づいただろうか。あるいはあなたは、4名の人物のうち左の3名はゴジラを見上げているらしいのにたいして、右の眼帯をした男性は、すくなくともこの3名と同じ場所からゴジラを見上げているわけではないらしい、ということに気づいただろうか。

それくらい余裕で気づいたかもしれないし、よく見たつもりが気づかなかったかもしれない（自省的な推測）。だが、いま理解してほしいのは、「中央にゴジラ」「左に題字」などよりも、上記の戦闘機や人物の視線についての分析のほ

うが相対的に高度であるということだ。**相対的に高度であるとはつまり、気づく人数が減るということである。**このように、自明性と非自明性は、グラデーションで連続している。

じっさいに非自明であるかどうかは、オーディエンスに聞いてみるまでわからない。だがわれわれは、たえずオーディエンスに確認しながら自分の分析の独自性をチェックできるわけではない。だからこそ、上記の知的謙虚さが求められるのだ。

これは極端な状況と対比しておくとうわかりやすくなる。たとえばあなたが、このポスターの分析というテーマで学術論文を書くでしょう。学会誌に投稿するような、2万字程度の、本格的なものである。そこで要求される分析は、もちろん新入生むけの授業の初回で出される宿題の要求よりも高級なものになる。なぜならば、オーディエンスがプロ集団だからだ。では、オーディエンスがプロだとどうなるのか。**自明性のハードルが上がるのである。**

そのプロのオーディエンスは、『ゴジラ』のポスターに詳しい。当然ながら、上述した戦闘機の種類や登場人物の配置などについては、とうに知悉しているにちがいない、そう想定せねばならない。そこでは、新入生むけの授業の初回では独自かもしれない分析も、自明であり無価値であると判断されうるというわけだ。

この原理編において理解してもらいたいことは、人文学における価値生産においては、教室でのカジュアルな発表から学術論文にいたるまで、この「**誰でも気づく**」という自明性のさきにすすむことで独自性を提出するという条件がつきまとうということである。

つまりテキスト分析において、その価値は**相対的に測定される**。だからわれわれがテキスト分析によって価値を発生させるには、「そもそもどこまでは誰でも気づくのか」をなるべく正確に予見できる能力が求められる。そうでないと、ある程度の注意深さをもつ分析者ならかならず気づくであろう「戦闘機が3機飛んでいる」という観察に価値があるのではないかと誤診し、そこで分析を止

めてしまうからだ。

テキスト分析において、われわれは独自性をポンと手に入れるわけではない。誰もが中央のゴジラと左の題字から始めるほかないのであって、重要なことは、そこから4名の人物へ、彼らの配置へ、視線へと、徐々に分析をすすめてゆくことなのだ。この操作において、われわれは、**自明性から非自明性のほうに移動している**のであり、独自性は、そうした分析のプロセスのなかで徐々に現れてくるものである。

だからわれわれに要求されていることは、ただやみくもに奇抜さでオリジナリティを演出することではなく、**特定のオーディエンスを想定して、その人たちがどのあたりから価値が発生したと判断しはじめるかについてなるべく確からしい予測を立てながら、独自性のほうに接近してゆくこと**にほかならない。

では、どのように「あたりまえ」を予見し、そのさきにすすめばよいのか——その主要な方法論については実演編で解説するが、すくなくとも現時点で、**独自性を手に入れるには、まず自明性のエッジに到達する必要がある**そうだとはいえるだろう。つづいて、そのことについて考えてみたい。

3. 分析とはなにか

さきに、中央にゴジラがおり、左に赤い題字があるという分析は、無価値ではあるものの、すでに「分析」の一種ではあるのだと書いた。そのことを説明しよう。すこしだけ、語源の話に付き合ってもらいたい。

いま「分析」という言葉で知られる日本語は、**analysis**（アナリシス）という英語の訳語である。現在の日本語感覚において、この言葉の意味をうまく理解するには、「分析」という言葉から攻めるよりも、もとの英語の対義語である **synthesis**（シンセシス）から考えたほうがよい。

では **synthesis** とはなにか。「科学」「理性」「意識」など多くの優れた訳語を考案して現代の日本語のベースをつくった西周は、かつてこの **synthesis** という

語に「**総合**」という訳語を与えた。いまでもこの単語を英和辞書で引くと、「総合」ならびに「**統合**」の訳語が並んでいる。

現在、この「総合」「統合」という言葉から連想されるのは、「**複数の要素がひとつに合わさる**」という事態であるだろう。じっさい、どんな英英辞典で synthesis を引いても、それと大差ない定義が書いてある。つまり日本における synthesis という英単語の翻訳と理解については、当時も現在も、とくに問題がない。

それにたいして analysis の訳語である「分析」はどうか。現代の日本語感覚において、それは「**複数の要素がひとつに合わさる**」の対立概念としてはイメージされていない。もちろん「分析」と「統合」が対義語であることは常識の範疇だし、いくつかの専門的な用法には正しい用法が残っている。しかし「テキスト分析とはなにか」と問われて、すぐに「それは統合の反対だから……」と考えるひとは、なかなかいないだろう。

だが、上述した synthesis の意味から理解できるように、analysis とは本来、**複合体を要素に分ける**という意味なのだ。さらにこの言葉をギリシャ語源まで遡れば、そこには、からまったもの・編まれたものを「**解く**」というニュアンスが宿っていることがわかる。

かくして西は、いみじくも、この analysis という英単語に「**分解**」という訳語を当てたのだった¹。

分析、それは**統合された複合体を分解する**ということである。つまり構成要素にバラすということであり、じつのところ「分」はもちろん、「析」もまた「**わける**」という意味をもつ漢字なのだ。

そのうえでポスターに戻ってみよう。さきに例題を出して、わたしは「まずあ

1 西周「心理學翻譯凡例」、約瑟奚般（ジョセフ・ヘーヴン）『心理學』上冊（文部省、1878年）、3頁。

あなたは、なにかに注目したはずである」と書いた。この「注目」という行為が、じつは分析の基礎をなすものである。

ゴジラ本体や赤い題字などに「注目」することができるのは、**あなたがこのポスターを複数の要素の複合体であると認識し、それを分解して、ひとつの要素をピックアップした結果**にほかならない。それは統合の反対の操作であり、すなわち分析である。だからそれは、無価値ではあっても、すでに分析の名に値するのだ。

分析は、注目からはじまる。あるいは、要素に分解することと、要素に注目することは、ほぼ同一の操作であると考えてもよい。注目するには分解することが必要だし、ある要素を分解して取り出すという行為は、その分解される要素になんらかのかたちで注目しないと実行不可能だからだ。

そのうえで、さきの「ここまでは誰でも気づくだろう」という推察と自省によって独自性のほうへ、自明性のエッジへ進んでゆくという構造をあらためて考えれば、テキスト分析による価値産出のためには、**第一に、とにもかくにもテキスト内に存在する情報を拾いつくす**ことを目指すべきであるということになりそうだ。

まずは、中央のゴジラ、左の題字。つぎに、4人の人物、炎上する国会議事堂、旋回する戦闘機。つづいて、戦闘機の種類、人物の視線……こうして**テキストという統合物をできるかぎり要素へと分解し、そこから最大限の情報をひき出すこと**、これがテキスト分析で価値を生み出すための第一歩となる。

では、要素にバラすだけで価値が発生するのだろうか。その答えは、イエスかつノーである。

べつの具体例で考えてみよう。わたしが友人とクラシック音楽のコンサートを聞きに行くとする。その友人はプロのバイオリニストであり、わたしはクラシック音楽にまったく詳しくない。友人はもちろん、わたしも上演中に居眠りすることなく、最後まで真剣に聞いていた。さて、この条件下で、**わたしたちが**

音楽から受け取った情報量は、同じであると考えられるだろうか。

むろん否である。プロのバイオリニストがクラシック音楽の鑑賞から受け取る情報量は、わたしのそれとは比較にならない。それが交響曲だとすれば、バイオリンの運指や弓の動きなどについてはもちろん、打楽器や管楽器とのアンサンブル、指揮者による解釈の特徴、会場の音響、それらすべてが友人には、書いて努力せずとも「聴こえて」いる。あるいは「見えて」いる。

かたやわたしは、いくら意識を集中したところで、それらを情報として受け取ることすらできない。わたしは**統合された音楽を統合されたまま受け取るほかない**のであり、それはつまり、わたしにはクラシック音楽の分析能力がないということを意味する。わたしはそれを、要素に分解できないのだ。

『ゴジラ』のポスターを眺めたり、あるいはクラシック音楽を鑑賞したりすることは、誰にでも可能である。だが、そうしたなんの変哲もないテキストから受け取ることができる情報量には、ひとによってギャップがある。それは、**統合物を要素に分解し注目する能力、すなわち分析能力に、ギャップがあるから**にほかならない。

そして、このギャップにおいて、**友人の分析は、わたしの分析よりも優れている**。これが、「要素にバラすだけで価値が発生するのか」という問いへの答えがイエスであることの意味だ。友人の要素分解は、わたしの要素分解よりも価値が大きいのである。

しかし同時に、要素にバラすだけで価値は発生するのかという問いへの答えは、ノーでもある。

このように分解をつづけた結果として最終的に得られるものは、要素が延々と羅列されたリストである。そのリストは、基本的には短いよりも長いほうがよいと考えていいのだが、しかし、**それをひたすら長くすることそれじたいがテキスト分析の目的ではない**。

これは授業での課題という設定から捉えなおせば明白である。教員があなたに期待していることは、授業でテキスト内にある細々とした要素を延々と読みあげることではないということは容易に想像できるだろう。つまり、あなたはこの目録を、**なんらかのかたちで「まとめる」必要がある**。

いいかえれば、理論上、**分解によって要素は無限に増やすことができるが、しかし、それに比例して価値も無限に増えてゆくわけではない**。あなたはどこかで分解を停止し、つぎの操作に移ることで、「テキスト分析」のプロセスを完成させなくてはならないのだ。

ではその「まとめる」操作とは、いったいどういうものなのか。その操作にはいくつかの段階があるのだが、本章ではその最低限の原理だけ理解することを目指して、残りは次章に譲ることにしよう。

4. 統合と理解

哲学における analysis の観念史を整理したマイケル・ビーニー＋トマス・レイスマスは、これまで歴史的に analysis という言葉に与えられてきた多くの意味を、いくつかに分類している²。そこできわめて興味深いのは、アナリシス（分析）は、**その対義語であるはずのシンセシス（統合）の意味を内包している**ということだ。

そこでビーニー＋レイスマスは、**なにかを理解するということはすなわち、それが全体とどのように関係しているかを理解することなのだ**と述べている。つまり、統合なくして理解なし、と言っている。

たとえば「ゴジラは大きい」という「理解」は、ゴジラがポスターのデザイン全体において占める割合、あるいは人間・建物といった比較対象、こうした

2 Michael Beaney and Thomas Raysmith, "Analysis," *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, edited by Edward N. Zalta and Uri Nodelman, Fall 2024 Edition, <https://plato.stanford.edu/archives/fall2024/entries/analysis/>

「全体」との関係において、はじめて正しい理解として成立している。たとえばゴジラよりも大きな生物が描かれていたり、あるいは砂漠にゴジラが単体で立っている場合などとくらべてみれば、「ゴジラは大きい」という揺らぎようがないように思える理解もまた「全体」という文脈に依存していることがわかるだろう。

われわれはテキスト分析によって価値を産出することを目指している。分析の第一段階は「分解」だが、理論上、その果てにあるのは取り尽くされた情報の目録であり、それは最終的な目標ではない。そして、思い出そう、「このテキストを分析せよ」という要求は、暗に「独自の分析によって価値を産出せよ」と要求しているのだった。

では、なぜ目録は価値産出というテキスト分析の要求を満たさないのか。オーディエンスの立場からいいかえよう——**読者が「この分析から価値を受け取った」と感じる条件とはなにか。**

それは、**そのテキストについての理解が進展すること**である。テキストから抽出された要素のリストは、いくら長くとも、そのポスターについての理解を提供しないのだ。

ではその「理解」とはなにか。そう、それが統合なのである。

誰もがテキストを与えられた時点で、そのテキストについてある程度の分析（分解と統合）を行い、ただちに一定の理解を得てしまう。これが、**ほぼ自明な分析とほぼ自明な統合から産出された、ほぼ自明な理解**である。

そこで読者が求めていること、つまり「価値が発生した」と判断するかどうかの基準は、その**すでに得られている自明なテキスト理解が更新されるかどうか**にかかっている。ここにもやはり、先述した価値生産における「自明性の先に進む」という構造が現れていることに注意しよう。

そのためには、目録の列挙ではなく、**自明ではない理解そのものを読者に手渡**

す必要がある。ここに、分析から統合へのシフトが要請されるのだ。

では、いかにして要素のリストを統合すればよいのか。統合とは原理的にいかなる行為なのか、そして、それが理解を更新するための条件とはなにか。これらが次章の課題となる。